

日本の王陵と儒教・仏教・神道

— 東アジアの視点から —

吾 妻 重 二

Japanese Royal Tombs and Confucianism,
Buddhism, and Shintoism: Perspective from Rituals of East Asia

AZUMA Juji

キーワード：儀礼 (Rituals), 喪礼 (Funeral Rituals), 祭礼 (Ancestral Rituals),
天皇 (Japanese Emperor), 将軍 (Shogun)

このたび「陵墓からみた東アジア諸国の位相 — 朝鮮王陵とその周縁 —」シンポジウムが開かれ、コメントを発表することになった。東アジア規模で陵墓を検討するというのはきわめて興味深いテーマであり、ここでは礼学の立場から日本の場合を中心にいくつか意見を述べることにしたい。

1 中国儒教儀礼と皇帝の葬礼

まず、王陵を伝統思想の中で考える場合、儀礼の中に位置づける必要があるということがある。王陵はやみくもに造営されたのではなく、一定の規範に沿って作られているからである。また、朝鮮王陵が中国の陵墓制の強い影響下にあったことも考慮しなければならない。その場合の規範というのは他ならぬ中国の儒教儀礼である。

そもそも、中国の儒教礼制は国家レベルにおいて五種類に分けられていた。いわゆる「五礼」がそれであり、(1)吉礼、(2)凶礼、(3)賓礼、(4)軍礼、(5)嘉礼に分類される。第一の吉礼はさまざまな神格・祖先(鬼神)の祭祀をいい、第二の凶礼は葬儀や服喪、^{とむら}弔いなどの礼、第三の賓礼は賓客に会い、もてなす際の礼、第四の軍礼は兵制や軍事にかかわる礼、第五の嘉礼は慶事をことほぐもので、冠礼や婚礼、飲食、射、饗宴などの礼をいう。このうち王陵は第二の凶礼(葬儀)および第一の吉礼(祭祀)と密接なかかわりをもっている。

ところが、古代中国における天子諸侯の葬礼がどのようにとり行なわれてきたのか、古文献における記述は乏しい。『儀礼』士喪礼篇、既夕礼篇、士虞礼篇はいずれも凶礼と祭礼にかかわる記述であるが、

基本的に士身分のための儀礼であって、天子諸侯の儀礼ではない。しかも墓制に関する記述はこれらにはまったく見られない。他には『周礼』春官の小宗伯や冢人、墓大夫の項、『礼記』喪大紀篇、問喪篇、檀弓篇などに断片的記述があるにすぎず、古代においてどのような墓制が行なわれていたのかははっきりしないのである。

皇帝の葬礼は漢代に至って明示的に整備されたようである。そのことは『晋書』礼志に、

古者天子諸侯葬礼粗備，漢世又多变革。魏晋以下世有改变。大体同漢之制。

とあり、西晋・司馬彪『続漢書』礼儀志下「大喪」（范曄『後漢書』所収）が後漢における皇帝葬礼について詳細に記述することから推測される。この後漢における墓制は後世、大喪儀礼の出発点となったものであるが、これらの文献において陵墓のつくりについてはこれといった説明がない。

事情は『大唐開元礼』についても同じであり、その吉礼部分に「皇帝拜五陵」の記事はあるが、墓制についての説明はない。凶礼部分を見ても葬儀の方法と喪服について述べるにとどまっているのである。

このように、儒教文献においては「どのような墓を作るか」という墓制への関心は「どのように祭るか」という廟制（祭礼）に比べると薄いとわなければならない。これは、伝統儒教において「墓祭」よりも「廟祭」の方が重視されていたことと関係があるであろう。

2 日本における王陵（天皇陵墓）の特徴——その1：遺棄

では、日本における王陵はどうだったのだろうか。日本古代（3世紀～7世紀）において巨大な前方後円墳が造営されたことは広く知られているが、実はそれらは埋葬者が誰なのかまもなく不明になり、一種の「死体遺棄」の場ではなかったかと指摘されている。

たとえば尾藤正英『日本文化の歴史』は、

これら前方後円墳については、その大部分の被葬者が不明のままとなっている点が注目される。……天皇家の祖先を葬った古墳が、このように被葬者不明となっているのは、諸外国に比べて異例であり、天皇の君主としての地位が歴史を通じて存続してきた点からすれば、不思議なことである。この事実は、死者の墳墓を祭る風習、したがってまた、祖先崇拜の風習が、古代の日本には果たしてあったのであろうかという、重大な疑問につながる。（同書19頁）

といい、

（近世の）詣り墓が仏教の影響で生れたとすれば、古代以来の日本の一般の諸庶民の墓は、埋め墓だけであり、それは捨て墓ともよばれるように、死体遺棄に近い性格のものであったと推測される。古墳の被葬者が不明になっているのも、葬った時の儀礼は重要であっても、その後に継続して死者のための祭祀が行われるということはなかったからであろう。これも一種の遺棄である。（同書132頁）

といている。

日本古代の巨大古墳には中国の王陵の影響が一定程度認められる。しかし、そこでの墓祭は継続されなかった。言い換えれば祖先崇拜の観念は薄弱であって、「どのように祭るか」はさほど考慮されなかったのである。陵墓は死体遺棄の場だったという指摘にはきわめて説得力がある。

そればかりか、日本では中世以降、王陵は仏教の墓制にとって代わられることになる。このような仏

教の影響が入り込んでくる点は、他の東アジア諸国の王陵とのきわだった違いをなしている。

3 日本における王陵（天皇陵墓）の特徴——その2：仏教の影響

日本においては、仏教の影響を受けて8世紀初め頃から火葬が一般化する。持統天皇（702年没）が火葬されたこと、淳和天皇（840年没）が火葬後に散骨されたことなどは、仏教の影響としてよく知られている。

こうして皇室は仏教との関係を強めていき、13世紀以降になると京都の泉涌寺が皇室の菩提寺となる。これは四条天皇（1242年没）の葬儀を泉涌寺が営み、寺内にその墓を作ったことに始まっている。以後、泉涌寺は「御寺（みてら）」となり、中世・近世を通じて皇室の菩提寺となった。陵墓といっても名ばかりで墳丘はなく、仏教式の石塔墓で済ませるようになったのである（図1）。

このように、日本の中世・近世の王陵は仏教の影響のもとに営まれている。とりわけ京都の真言宗泉涌寺は天皇家の菩提寺となった。天皇家は真言宗の檀家になったわけである。

また、祭祀についていえば、宮中の「御黒戸（おくろと）」は光孝天皇（887年没）に始まるらしく、天智天皇以降の位牌を祀っている。「御黒戸」はある意味で「宗廟」に相当する場だったのであるが、その規模は小さく、祭祀も仏式で、江戸時代末に至るまで存続している。

なお、日本で伝統的に宗廟の名で呼ばれていたのは伊勢神宮である。ただし伊勢神宮は祖神としての天照大神を祀るもので、歴代皇帝や国王の霊を並べ祀る中国の太廟や朝鮮王朝の宗廟とは性格が違う。結局のところ、日本の皇室には儒教儀礼という宗廟に相当するものがなかったことになる。これも「どのように祭るか」が特に注意されなかったことを表している。

4 江戸時代における将軍の墓

一方、将軍の墓はどうだったのであろうか。江戸時代の将軍の墓は次の場所に営まれている。括弧内は何代目の将軍であるかを示す。

- 日光： (1)家康〔東照宮〕, (3)家光〔輪王寺大猷院霊廟〕
江戸・芝増上寺： (2)秀忠, (6)家宣, (7)家継, (9)家重, (12)家慶, (14)家茂
江戸・上野寛永寺： (4)家綱, (5)綱吉, (8)吉宗, (10)家治, (11)家斉, (13)家定

これらがおおむね仏教式で営まれていることに注意されたい。しかも、「霊廟」という呼ばれ方がされてはいるものの、実は墓所に建てられているという点で、これらは中国の礼制でいう「墓祠」（陵寢）に相当し、「廟」（宗廟、家廟）ではない。徳川将軍家は皇室と同じく宗廟（家廟）に相当する施設を持たなかったのである。

もっとも、近世日本の大名で家廟を造営した例はいくらかある。岡山藩（池田光政）、水戸藩（徳川光圀）などがそれである。これらは儒教の強い影響を受けて作られたものとして注目に値するが、儒教式

家廟は結局、日本では普及しなかった。これは中国に太廟があり、朝鮮王朝に宗廟があるのとは著しい違いをなしている。

なお、米沢藩主の上杉家廟所（うえずぎけ・びょうしょ）は家廟と呼ばれることがあるが、実はそれは墓祠であって、礼制上、家廟と呼ぶのは正確でない。

5 明治以降の陵墓における神道と儒教——擬似的復古

ところが幕末になると、国学思想の発達に沿って廃仏棄釈・神仏分離の動きが顕在化してくる。天皇陵も国家的な復古神道による再編にともない、仏教伝来以前の古い形が擬似的に再現されるようになった。こうして明治天皇の父孝明天皇（1866年没）の墓は泉涌寺内に、古代古墳に似た復古調の円丘として作られた（図1）。場所は寺でありながら、形は古代ふうの墳丘なのである。その後、明治天皇の陵墓は京都伏見桃山陵として、大正天皇および昭和天皇の陵墓は東京八王子市武蔵陵墓地として、いずれも上円下方の墳丘が造営されている。

このような動きにもなって、宮中の「御黒戸」が廃止され、新たに「皇霊殿」が建てられることになった。皇霊殿は明治22年（1889）、賢所・神殿とともに「宮中三殿」として東京の皇居内に造営され、現在に至っている（図2）。皇霊殿は歴代天皇の霊を祀る施設である。

幕末から明治にかけて、天皇陵は復古神道とそれにもとづく国家神道により、仏教伝来以前の形が擬似的に復元されたのである。祭祀についていえば、それまでの仏教ふう御黒戸を廃止して皇霊殿が皇居内に造営されたのは、儒教礼制の「宗廟」にあたる祭祀施設が皇室において初めて作られたことになる。そうであれば、これは明治以降の国家神道が儒教の影響を受けていることを物語るものといえるであろう。



図1 泉涌寺航空写真 左側に並ぶのが中世・近世歴代天皇の仏教式石塔墓、右側が孝明天皇の円墳陵墓
(Google Earth 2010年7月7日による)



図2 皇居内の宮中三殿 向かって左側に皇霊殿がある
(村上重良『天皇の祭祀』による)

参考文献

- 鈴木尚 他『増上寺 徳川将軍墓とその遺品・遺体』（東京大学出版会，1967年）
村上重良『天皇の祭祀』（岩波新書，岩波書店，1977年）
岡田荘司「神道葬祭成立考」（『神道学』第128号，1986年）
村上初一『霊廟建築』（日本の美術12，至文堂，1990年）
岡田精司「前近代の皇室祖先祭祀——「陵墓」と御黒戸祭祀」（日本史研究会・京都民科歴史部会『「陵墓」からみた日本史』所収，青木書店，1995年）
『天皇の本』（Books Esoterica 第22号，学習研究社，1998年）
尾藤正英『日本文化の歴史』（岩波新書，岩波書店，2000年）
吾妻重二「儒教祭祀の性格と範囲について」（『アジア文化交流研究』第1号，関西大学アジア文化交流研究センター，2006年）
吾妻重二「水戸徳川家と儒教儀礼——葬礼をめぐる」（『東洋の思想と宗教』第25号，早稲田大学，2008年）
吾妻重二「水戸徳川家と儒教儀礼——祭礼を中心に」（『アジア文化交流研究』第3号，関西大学アジア文化交流研究センター，2008年）
吾妻重二「池田光政と儒教喪祭儀礼」（『東アジア文化交渉研究』創刊号，関西大学文化交渉学教育研究拠点，2008年）

